

《巻頭言》

科学分析支援センター創立 30 周年を迎えて

工学部長 佐藤 勇一

昭和 55 年に分析センターを設立してから 30 周年を迎えることができましたことに、今日にいたるまでご尽力されました多くの先生、職員の皆様に心から御礼申し上げたいと思います。かつて、理学部化学科下沢隆先生(現名誉教授)が、ハーバード大学の化学教室では大型の分析機器全てを一室に集め、一人の研究者と数名の技官で管理していることを見聞され、各研究室がばらばらに維持管理するよりは化学教室が共同で利用した方が能率も良く経済的であることを実感されたのが支援センター設立の端緒と伺っております。ご承知のように昭和 48 年に、大型の分析機器数台を運営する共通機器運営委員会が発足し、分析センターの母体となりました。埼玉大学の分析センターは他の国立大学にさきがけての設置であり、さらに、その運営および活動状況は他の大学の見本となり多くの見学者が訪れました。分析センターは設立されたものの、当初は建物がなかったために分析機器は各学科で大切に維持管理されていたようです。5 年後の昭和 60 年 1 月に新建屋が完成し、ようやく広いスペースが確保されました。設立当初からの機関誌を読み返してみますと、関係された先生方の喜びが当時の文章から伝わって参ります。

着想と実績により他の国立大学よりも早く分析センターを設立することができたものの、建屋がなく十分に共同利用の機能を効率よく果たすことが難しく、次いで、新建屋が完成し十分と思われた広さを確保したものの、今度は十分な人員を確保することが難しくなるなど様々な問題が生じましたが、関係する教職員による多大なる奉仕的活動で分析支援センターは問題を解決しながら運営されてきました。例えば、分析機器を使用するための予約に不便が生じるようになりましたが、これもネットワークを利用した予約システムを開発して解決されたようです。近年は人員のみならず、装置の設置スペースの狭隘化の問題も生じてきておりますが、関係教職員のたゆまぬ尽力により、様々な問題を解決しながら分析支援センターの活発な活動が今日まで続いてきております。私達はこう言った関係者のご努力を忘れてはならないと思います。

分析支援センターは学内の研究教育支援に加え地域からの依頼分析にも応える活発な活動を行ってきております。昨年は新しい分析機器が導入され、機器の更新も進んでいます。今後とも科学分析支援センターの更なる発展を願っております。